

春の風に吹かれて

これまで胸の奥で積もっていた影
春の風に吹かれてほどける

光が差し込んでくる 閉じていた窓
重たかったいくつかの思い連れ去って

長い闇を超えた後に

心の奥残っていた僅かな痛みも
そよ風に触れた今やさしく
まだ少し冷たく感じる空気の中
季節追い越す心

この冬動けなかった足も今は
そのわけもなくゆっくりと進める

道端の花そっと色を取り戻し
遠くの雲柔らかくその形変える

なやみの向こう側の

景色は思っていたよりもずっと広く
静かに輝いていた大きく
あの日言えなかった言葉が風に乗って
少し軽くなる気がした

ただ「進める」というこの事実が
こんなに嬉しいものと知った

春の風に吹かれて

この風がそれとなく教えてくれる
ようやく取り戻す無くしていたもの
まだ見ぬ明日へ揺れながら迷いながら
それでも前へ

やわらかい土のある所

幼い頃つけた足跡
まだどこかに残っている気がする
そこは
過ぎていった日々が
静かに息をしていた

乾いた道を照らすやわらかな陽の光
昔のあの日と同じように差し込んで

あの頃の笑い声
聞こえてくるような気がした

やわらかい土のある所
風の音が
忘れていたものを
そっと呼び起こす^_^

足音が深く沈んで
重たかったこの気持ちも
そっと地面に吸い込まれていく
まだ幼く感じる風の中で

ひらひらと笑う草に小さな影たちが
ぬくもり探しながら寄り添っている

ここではゆっくりと
言葉探すこともいらない

やわらかい土のある所
そこで見つけた
心の奥の固いもの
そっとほどける

あの頃の笑い声
聞こえてくるような気がした

やわらかい土のある所
風の音が
忘れていたものを
そっと呼び起こす

やわらかい土のある所
それは
ふと見つける自分だけの
静かな場所

消えない幻

ふと途切れた眠りの中
暗闇から見える豆球
ひとり夜の底でまだ震える
あの温もりもうどこにもなくて
ただ指先に冷たい空気
呼びかけることもできないままに

消えない幻 ゆっくり締め付ける
もう戻らない最後の灯火に

ふと現れた記憶の中
忘れていたふりをしていた
手を伸ばせば届くはずと思っていた
あの温もりもうどこにもなくて
まだ帰り道を探している
もう戻れないとわかっているのに

この心まだ失ったもの求めて
影の輪郭 探し続けている

消えない幻 ゆっくり締め付ける
もう戻らない最後の灯火に

灯台のそばの海

若かった頃に一人訪れていた
この灯台のそばの海に

久しぶりにフェリーに乗って
閉じ込めていた自分見つける

波の呼吸 昔から変わらないで
その時の悩みや迷いも映す
ここに来ればいつしか無くしたものも
まだどこかで生きている気がする

白い灯台が強い風の中
かすかに揺れていた 少し滲んで

あの頃思えば免許もなく
ギター抱えて 一人バスに乗って

誰もいない海めがけ歌った
大きな声も出せないままの生活
放つ声は波の音に消されて
胸の奥少しあつくなった

波の呼吸 昔から変わらないで
その時の悩みや迷いも映す
ここに来ればいつしか無くしたものも
まだどこかで生きている気がする

簡素に颯爽と 優美にイキイキと

水に生きるものたちも
傍目だけでわからない
仲間たちとのやりとりが
あるに違いないはずだ

人の社会もこの頃はたとえ孤独な生業も
繋がり合うのが大事と
見直されているワークスタイル

群れることよりも誰はばかることなく
付き合いをなくして気楽になろうとしても
一人だけでできることに限界感じて
悔やんでしまっても後戻りできない

こういうのがいい 不満なことに
合わせるだけでなく問い続けてゆきたい
僕はこれからも けして媚びない
良いと思うものだけ追い求めてゆきたい

水に生きるものたちも
傍目だけでわからない
異性とのつながりがあるに違いないはずだ

人の社会もこの頃は女だとか男だとか
問わないことが大事と
見直されているライフスタイル

気遣うことよりお互いの言い分で
差別ないところで同じように振る舞う
庇おうとすることに反感さえ持たれて
後退りしても なおさら気まずくなる

こういうのが好き 性別はどうあれ
支える人と 支えられる人

支える人は 簡素に颯爽と
支えられる人は 優美にイキイキと

こういうのがいい 妥協だけでなく
ときには向き合い確かめていきたい
僕はこれからも けして媚びない
水に生きるものたちと同じように

北風と太陽

通りの角回ってくる北風
今度こそ自分の強さ見せる

「どうしてみんな言うことを
聞いてくれないんだろう」と呟く

ほっぺ ふくらませながら思い切り
舞い上がる落ち葉に泣く看板

通りすがりの人の心まで
縮めてしまうようになっていく

「人の心は力だけでは動かない」
と聞こえない声で
見下ろす屋根の上見かねた太陽
小さな光の粒そっと落とす

こわばりほどけて
やさしくゆるみだす

自分ほど強いものはないと北風
だけどそれは見せるものでなかった

自分の思い伝えるだけでは
誰も本気にはなれない

押し付けることに疲れた時
黙ったその瞬間に見たもの

そっと触れた暖かさの中
思いのままに動く人たち

「ほらごらんよ 力でなくて
自分たちで動くの 待つだけでいい」
ただ照らす太陽 変わることなく
力むこともなく見守りながら

ひとすじの光
そっと落とすだけ

こわばりほどけて
やさしくゆるみだす

春の散歩道

新年度がまだ始まる前の日
その扉の向こうの見知らぬ場所へ
言葉にならない不安
胸のどこかでざわめいている
冬より明るい光に
照らされてまぶしい

心の扉 開ける音
体に響く
春の散歩道
ひかりが
そっと撫でていく

ゆっくり歩いて膨らむ土の匂いに
どこかしら 懐かしい気配感じる
名も知らぬ花が足元
手を振るように小さく揺れる
風に触れた影だけが
先に進んでゆく

心の扉 開ける音
体に響く
春の散歩道
ひかりが
そっと撫でていく

遠い日の思い出
戻ってくる
春の散歩道
記憶が
そっと目をさます